

『源氏友切丸』 影印と翻刻

『源氏友切丸』は鱗形屋から刊行された、五冊物の草双紙である。柱題は「ともきり」、五丁裏の作中署名から鳥居清満画であることが確認できる。

現在、国会図書館所蔵本および服部仁氏所蔵本が確認される。国会図書館本は改装本で元表紙を欠くが、第一巻の原題簽が貼付される。その様式は青色の外題簽と紅色の絵題簽が一对であり、初摺の新版として刊行されたと推定される。一方、服部本は第一巻を欠くものの原装を留めており、青本体裁の表紙に、紅色の外題簽と白色の絵題簽が一对となっている原題簽を完備している。二枚題簽様式の鱗形屋板の初期草双紙の場合、初摺の新版として刊行される場合は青本体裁の表紙に青・紅の題簽を、その再摺本には黒本体裁の表紙に紅・白の題簽を用いたものと推定されて

松 原 哲 子

注¹ いる。服部本は青本体裁でありながら紅・白の題簽を有しているが、摺りの状態から再摺本であると推定される。

本書の外題簽上部には、錦袋の意匠が配されているが、その図様から干支を推定することはできない。鱗形屋が二枚題簽の様式を用いた宝暦期半ばから安永初めごろの新版草双紙の内、当該年の題簽の様式が確定しないのは宝暦九年（一七五九）、宝暦十一年および明和三年（一七六六）である。

拙稿「明和三年刊鱗形屋板草双紙に関する検討」（『実践国文学』第七十三号、平成二十年三月）では、二枚題簽様式の鱗形屋板の題簽の内、当該年が明らかでない二つの様式について、その年代推定を試みた。その結果、『源氏友切丸』の二丁裏・三丁表にある多田満仲の夢に「鴻門の会」

の故事が登場した際の文言、六丁裏・七丁表の土蜘蛛登場場面の描かれ方に明和二年（一七六五）十一月江戸市村座初演「降積花二代源氏」一番目「蜘蛛系梓弦」の影響がみとめられることから、本書は明和二年以降、つまり右に挙げた候補の内、明和三年刊行と推定されるとした。

本作品の内容は、いわゆる「平家剣巻」のダイジェストとなつてゐる。刀の改名の場面を中心に梗概を挙げると以下の通りである。

源経基は平将門の叛逆を注進した褒美として位と源の氏を賜り、六孫王と号した。その子多田満仲は天下を守る身として心にかなう名剣が必要だと案じていたところ、鴻門の会の樊噲の剣舞の夢をみる。そこで満仲は筑紫国から鍛冶を召して二振りの剣を打たせる。罪人を試し切りさせたところ、一方は鬚まで、もう一方は膝まで切れたので、それぞれ鬚切・膝丸と名づけられる。その後、満仲は頼光に家を相続させ、鬚切・膝丸の二振りも渡す。

頼光の近臣渡辺綱は頼光の命を受けて一条戻橋で、鬚切で鬼の手を切り、鬚切は鬼丸と改名される。また、ある夜熱病に苦しむ頼光の元に大入道が現れ、膝丸で切ったところ大きな土蜘蛛であったことから、蜘蛛切と改名される。その後、源為義の代に、二振りの剣が

夜に獅子や蛇のような声で吠えたので、鬼丸は獅子の子、蜘蛛切は吠丸とそれぞれ改名される。為義は、婿引出物として熊野別当教真に吠丸を譲る。

為義は吠丸の代わりを新たに打たせ、名を考えている際に烏が夥しく鳴いたことから小烏と名付ける。小烏は獅子の子よりも二分ほど長かったが、土用干しのために二振りを障子に立て掛けて置いたところ、いつの間にか二振りが倒れ、小烏の目貫が二分ほど切られ、二振りと同じ長さになった。そこで、獅子の子は友切丸と改名される。その後、二振りは義朝に譲られる。

義朝が源氏重代の友切丸を持つているにも関わらず戦況が芳しくないのを嘆いてみると、次男朝長の夢に八幡大菩薩が現れ、「原因は友切丸の名にある。名を元の鬚切に戻せばよい。」と告げたので、すぐに名を改める。元の名に戻った鬚切は三男頼朝の手に渡って軍功を挙げる。

婿引出物として吠丸を譲られた熊野別当教真は、源氏重代の刀を自分が持つべきでないと考えて熊野権現に寄進したが、その後、源義経は権現から吠丸を譲られ、喜んだ義経は刀を薄緑と改名し、平家を滅ぼす。

その後、義経は頼朝との不和を嘆き、薄緑を箱根権現に奉納する。箱根別当は曾我五郎に薄緑を渡して敵

討をさせ、その後薄緑は頼朝の手に戻り、鬚切と膝丸（薄緑）の二振りが揃うことになった。更に時は移り、二振りは北条高時を討った新田義貞の手に渡るが、義貞は足利忠義との戦いに敗れる。二振りを手に入れた忠義は、足利尊氏に献上し、尊氏は二振りの威徳によって歴戦に勝利する。結果、二振りの剣は足利家に代々相伝し、十三代にわたる天下の武将となった。

以上のように『源氏友切丸』は「平家剣巻」をほぼ忠実にダイジェスト化した作品だといえる。その具体的な典拠は、広く流布したものを想定するべきだが、承応二年（一六五三）刊行の『つるきのまき』（国会図書館蔵）には本書五巻にみえる新田・足利両氏の場面がみられない。よって拠として使用した先行作品がどのようなものであったのか明らかでないが、剣の名の変遷に焦点をあてていることや、展開の類似性などからいって、具体的な典拠となった「平家剣巻」があつたものと考えられる。

先に挙げたように、『源氏友切丸』は五冊物である。多くの草双紙が二、三冊で完結していることからいえば長編であり、本書のように大部の作品を抄録することが可能である。当時鱗形屋は毎年十四作品程度の新板を刊行しており、その内一点が五冊物となっている。これらの鱗形屋板の五冊物を概観してみると、他の二、三冊物とやや異なる傾向

が見出せる。それは、特定の歴史的人物に焦点をあてた一代記的な作品や、本書のように大部な文芸を典拠とするものが多い点にある。これらは内容が時代に左右されないため、長期間に亘る刊行が可能である。実際、現存する諸本を見てみると、様々な方法で何度も再摺本の刊行がされたことがわかる。例えば、『源氏友切丸』は、先に挙げたように鱗形屋から初摺の新板としての刊行がなされた後、同じ板元から再摺されているが、さらに鶴屋が求板し、『五冊物／源氏開運友切丸』として刊行している。この他の鱗形屋板の五冊物にも同様の例が多く見られ、長く読者に受け入れられる作品性を持っていたことが窺われる。

「五冊物」と書名の上に冠する題簽は、鱗形屋からの求板を後に鶴屋や鳶屋が刊行する際に用いた様式だが、「二冊物」「三冊物」と冠した題簽がないことから、五冊物が他と区別されるものであつたことを示しているといえる。「五冊物」という言葉は、長編であることを指すものだったのであろうが、同時に、購買者（読者）にある程度内容を知らせる役割を果たしたという可能性を考えてもよいのではないだろうか。

先に挙げたように、服部本『源氏友切丸』は青本体裁の表紙に紅・白の題簽を伴う原装本で、鱗形屋の初摺・再摺の基本的な法則から外れる様式を持っている。たまたま製

本時の都合でそうなったという以外の原因を考えるならば、本書が五冊物であり、いつ再摺しても不都合のない性質であったことを考慮するべきだと思われる。現存する鱗形屋板草双紙を概観してみると、再摺本として黒本体裁で刊行されたものの中には、ある年の初摺を一括して再摺したものが多く含まれるようだ。^{注3} それに対して五冊物は毎年でも刊行して構わない内容のものであったため、単独での再摺がされた結果、全体として鱗形屋板の法則から外れる特異な装丁となつてしまった、という可能性を考えてみる必要があるだろう。^{注4}

以上のように、『源氏友切丸』は鱗形屋の草双紙刊行のあり方を考える上で重要な意味を持つ作品である。内容に関していえば、本書の挿話のひとつひとつは様々な板元から刊行された二、三冊物の草双紙でも材に採られたもので、初期草双紙というものの性質を考える上で有用な作品だといえる。また、五冊物の再摺を含めた享受のあり方を考えていく上で、服部本の存在は大きい。

刊年推定の問題に関していえば、錦袋の意匠を用いた二枚題簽が明和三年のものであることをより明確にしているためには、他の様式が明和三年ではないことを証明することも必要であるが、今回は今後検討を重ねいく上で基準となる本作品を紹介することとしたい。

注1 拙稿「鱗形屋板絵外題考」(『近世文芸』第八十七号、

平成二十年一月、日本近世文学会)

2 例をいくつか挙げると以下の通り。

『東岸柳南枝梅／簾管隅田川』

↓『五冊物／笛竹隅田川』(鶴屋板)

『実盛本末記』↓『五冊物／実盛一代記』(鶴屋板)

『和漢／面向不背珠』

↓『五冊物／面向不背珠』(蔦屋)

『双仁苜萱／京水染桜』

↓『五冊物／苜萱一代記』(蔦屋)

3 注1に同じ。

4 他に、大東急記念文庫蔵『鎌倉秘事／北条九代序』(明和八年刊、鳥居清満画、鱗形屋板)が黒本体裁の表紙に青・白の二枚題簽を伴う例などがある。本書も五冊物である。

付記

本稿を成すにあたり、資料の調査・掲載を許可下さいますした服部仁氏、国立国会図書館をはじめ、各所蔵機関に深謝いたします。

○第一卷

(二丁表)

序

それ横刀は武門の魂身を護る要具の随一なり 倶梨伽
羅不動の利剣を二ツに割て雌雄の刀剣とす そもく日

本名家の重宝多き中に殊に勝しは源家の宝刀鬚切膝丸小
鴉なり 此三振の剣の来由をたづぬるに多田満仲に始り
それより代々に伝ひて六条の判官為義の節鬚切を友切
丸と改銘せり 此友切丸をといふ事は春毎に曾我の狂言
に工藤時宗が仕内を見物してみな人のしれる所なればそ
の間に源平の盛衰ありし事を今様の綺語にあやなし童児
女の翫となす事然り

(二丁裏・二丁表)

そもく源氏と申は人王六十一代しゆしやくるんの天慶
三年平のまさかど下つさのくに、ほうきしわうゐをかた
ふけんとす 此とき源のつねもとはむさしのくに、ゐ給
ひしがいそぎ上らくしてまさかどがほんぎやくの事をち
うしんす 此御ほうびとしてくらゐをたまはり六そん王
とかうす

はじめて源の氏をたまはる

つねもとはさだずみしん王の子なり せいわてん王のだ
い六の子なるゆへに六そんわうつねもと、申すなり

多田のまんぢうはつねもとの子なり 此ときさいこくに
てすみともほうきす つねもと一代のぶごうをあらはし
いゑのほまれをのこし天とく二年十一月御とし七十二さ
いにておはり給ふ

女ぼうたち御ぜんへつめらる、

六孫王

(二丁裏・三丁表)

多田のまんぢうつくぐおもひ給ふは 天下をまもる身
として 心になふめいけんなくしてはいかゞとあんし給
ふゆめに

むかし かのかうそ楚のかう宇さんくわいの時 かうそ
しやうくはいといふしんかをめし 以上三人三しやくのつ
るきをぬいて あくまがうぶくのまひとなづけ がくをはや
させてまひ給ふ これは かうそをうつべきのはかりこと
にてもんをとぢて ひとをいれさりしにもんぐわいにひ
かへゐたるこうそのしんかはんくわいといふもの ぶかく
のをとをきく さつまつのてうししのくらいあり さて
こそわがきみのいのちあやうしとて はんくはいもんをや
ふり内へとびいり かうそのかどうとのまひをまふへしと
て だいとうれんといふつるぎをぬいて ともにまひけり
はんくわいがまひにて かううのはかりことはやみぬ
これよりして 太平らくのまひは四人になるときこへけり

(三丁裏・四丁表)

それよりまんぢうはくろがねをあつめ かぢをめしてた
ちをうたせ見給ふに 心になはず ある人申やうちくぜ
んのくにみかさこほりつち山といふ所に むくよりいた
りしめいかぢ有と申をはやがてかれをめしてうたせられ

しに これも心になはずして 国へかへらんとす

時にかの刀かぢおもふは われはるぐつくしよりめさ
れ かひなくまかり下らば いゑのなをうしなはんこそむね
んなれとて おとこ山八まんへまいりきせいする

何とぞさい上のけんをつくりいださせたひ給へ すへは
大ぼさつの御けんとならんと たんせいをこらしいのりけ
り

らう女 あいづちをうつ

さる程に七日の夜御じけん有 さい上のつるぎふたふり
うちたてけり 長さ二尺七寸なり

かぢのさいく人よるこびけんをとりもち満仲にたてま
つり御ほうびたまはりつくしをさしてかへりけり

(四丁裏・五丁表)

まんぢうは かぢがうちたてたる二ふりのけんを見給ふ
に 大ぼさつのおうごゆへ さい上のめいけんなれば 御よ
ろこびかきりなし

さて又 まんぢう二ふりのつるぎをもち あめが下をしゆ
ごしたびぐのぶごうおびたし

さて ふたふりのつるぎためし心みんとて ふじはらのな
かみつうけ給はり やういして つみあるものをごくやより
ひきいだしどだんにすへてためしける 一つのつるぎに
ては ざいにんのかうべをわり ひげをくわへてきりければ

ひげきり丸となづけ 又一ふりの劍にては ぎいにんとう
なかよりひぎをくわえて切ければ ひぎ丸となづけらる

藤原なかみつ

(五丁裏)

その、ちまんちうは つのくにたゞの庄にゐんきよあり
ていはつし まんけいとあらため 七十五さいのことぶき
をのべ給ふ

その比 きんりの御まもりにすへの御おと、みつながに
仰らるべかりしを びやうしんなりとて 頼光いゑをそうぞ
くありて 一一ふりのけんをこれよりゆづらる、

頼光十七さいにては はんぐわんだいと成給ふ

ひげ切ひぎ丸ふたふりのつるぎ らいくわうわたさる、

鳥居清満筆

○第二卷

(六丁表)

こゝにらいくわうのきんしん わたなべたきくちつなど
いふもの あるよらいくはうのお、せをうけ給はり 一でう
もどるはしをとをりける時に あやしきをんなにゆきあひ
すかさず こしにたいせしひげきをぬいて おにの手をき
る これよりして ひげ切をおに丸とあらためらる

わたなへきつたるからはてがら

(六丁裏・七丁表)

らいくわうは せんじやうがだけのおにをたいぢ 又は
いぶき山のあくとうをうち いちはらの、きやうどをちう
し そのほかのぐんこうかぞふるにいとまあらず

天ろく元年 まんちうゐんきよし給ひ らいくはうかたく
をつぎ 大内しゆごになり給ふ

しかるに いつとなくかぜのこゝちとてなやみ給ふ い
りやうてをつくし 御くすりをす、むれど さらにげんもな
く日にましおとろへ給ふ

これは としをふるつちぐも大入とうとばけて よなく
きたり おどろかし申せしなり

(七丁裏・八丁表)

かくて らいくはうきやくのやまひとなり おかんほつね
つつよくよるひるおかされ給ふ ある夕くれにとろく
ねいり給ふおりふしかの大にう道あらはれたゞひとくち
にくらひつかんとせし時 御めをひらき 心へたりとてまく
らにありしひぎ丸をぬきうちにきりつけ給へば あつとい
ふてにげさりぬ これより御びやうきへいゆうせり これ
により ひぎ丸をくもきりと名をあらためらる その、ち
御しやていよりもとにゆづられ それよりよりよしにわた
され よりよしより八まん太良よしいゑのたからとなる

四天わうの人くかけつけ見れば 大きなるつちくもの

あしをきりおとし給ふ

きんとき かけきたる

源のらいくわう

(八丁裏・九丁表)

源のよりよし ぜん九年後三年のた、かひあり あふし
うに入給ふ所に よりときが子さだとう法にそむき ころも
川のしろにたてこもりしを よりよしせめた、かひ給ふ
よしいゑのぶゆうをおそれたゞ人ならず 八まん太良と申
すへしといへり これより八まん太良といふなり

又ではのせんほくの住人きよはらのたけのり よしいゑ
にかせいして こまつのおくをとり給ふ所に きがんとて
そらとぶかりつらを見だせしを よしいへ心づきあたり
をかりいだし給へばさたとうがふせゞひあらはれいで、
おつとりまく

よしいゑくもきり丸にてことごとく切はらひ給ふ それ
よりくもきり丸のつるぎ かはちの介よしたゞにわたり又
それより六でうのはんくはんためよしにゆづりわたされ
けり

源のよしいゑ

かつてんゆかぬ ときならぬに がんがしろをかへるは
ふせぜい あらはる

(九丁裏・十丁表)

六条のはんくはんためよし このときにいたつて二ふり
のつるぎ あるときよまずがらほへたり

おに丸がほへたるをとほし、のこゑにいたり くもきり
がほゆるこゑはじやにいたり このゆへにおにまるをばし
しの子とあらため くもきりをばへ丸とそかいめいせら
る かゝるおりふし ほうげんのいくさおこり 源平くわく
しつとなりてた、かいしも 此つるぎのほへしよりことお
こるとそ

そのせつ ためよしのむこくまの、べつたうきやうしん
かせいのため 一まんよきにてみやこへのほりしときむ
こひきでものに ぢうたいのいちぐをわけて へ丸をきや
うしんにゑさせける その、ちきやうしんおもふはこれ
はけんじのぢうだい也 わがもつべきにあらすとてごん
げんにおさめ奉る

くもきりのつるぎほゆる

おに丸のつるぎほゆる こゑししのことし

源のためよし

かつてんゆかぬことじや

(十丁裏)

ためよしほへ丸をへつたうへつるはしつるぎひとこし
にてかたてなきやうにほへければ はりまのくによりめい

かぢをめしよせし、の子をてほんにしてほへまるのつる
ぎむこひきでにくまの、へつとうきやうしんに下さる、

その、ちまた一こしをうたせらる、

六条のはん官ためよし

くまの、へつとう

○第三卷

(十一丁表)

さて此たひあらたにうたせたるめいけんをなにと名つけ
んとためよしおもはる、をりからからすおびた、しくな
きければ吉事とおもひことさらからすのめぬきありか
れこれつがふよしとて此つるきを小からすとなづけらる

はりまのかぢ御ほうひたまはりくにもとへかへる

(十二丁裏・十二丁表)

ためよしそのなつのどようほしに重代のたちかたなあ
またぬいてしやうじによせかけおき給ふ所人もさはらぬ
にからくとたをる、をときこへければおりふしていぜ
んにおはせしがつるぎこそころびぬもしそんじやしつ
らんとてとりよせて見給ふにひごろは二ぶばかりながし
とおもはれける小からすがし、のことおなじすんしやく
にそなりにけるふしぎなるかな

きりたるかおれたるかときつさきをみればきれもお

れもせずあやしんでつるぎをみればめぬきおれてなか
りけり

ぬいて見ればつかのうち二ぶばかりあたらしくきれて
めぬきをつきぬいてさがりけりこれはさだめてし、のこ
かきりたるよとこ、ろへて此時し、のこをともきり丸と
あらためしは此いわれなりその、ちふたふりのめいけ
んをしもつけのじやうよしともにゆづられけり

ためよしつるきのおとにふしんをたて給ふ

さてくなにやらさはかしいおとじや

小からす丸

し、の子

(十二丁裏・十三丁表)

すてにほうげん元年七月とばの法皇ほうぎよ有ければ
新るんたいりのいくさをこりもの、ふには平のきよもり
源のよしともだいをしゆこすよしとも父ためよしと
清もりおぢへいまの介とは新るんへまいりける少なご
ん入道しんせいちよくをうけ給はつてよしともきよもり
に仰せて新るんをせむるためともふせぎた、かふによ
つてくはんぐんお、くうたるその、ち新るんのいくさ
やぶれてしんるんしゆつけし給ひしをさぬきの国へなが
し奉るためよした、まさはかうさんしけれ共きよもり
そうもんしてた、まさをちうすこれ清もりげんじをほ

ろぼしへいけいつとうになさんとするのはかりこと也
きよもりよしともへたゞまさためよしをちうすべしと
あるくだしふみを給はる ためよしの子共八人みなとらへ
られてころさるゝ

きよもりよしともへくだしふみわたさるゝ
きよもり

(十三丁裏・十四丁表)

七十八代二条のゐんみかどのぶよりがのぞみいかゞあ
るへきとしんせいにあふせだんぜしかしんせい申すは
たかきくらゐにすゝむ事その人をゑらぶ なんとしてのぶ
よりなどがおよばぬ事也 うちすてゝさしおかれしかるべ
しとちよくとう申あぐる

院の御時へいち元年のころ 少なごんふちはらのぶより
といふものがぐさいなくして 時にあいくわんゐにのぼら
んことをのぞみけり

のぶよりかねて此のぞみありれば にようごかうゐへま
いないして心をつくし みかどの御おほへいかゞありとと
ひければ 女くわんたちしんせいがちよくとうのことばの
ことくはなしければ のぶより大にはらたちて しんせい
をなにとぞとうかゞひけり

女官たち

のぶより

(十四丁裏・十五丁表)

それよりのふよりひそかにぐんかくけんじゆつをこゝ
ろがけいかにもしてしんせいをほろぼしのぞみをかなへ
んとめしつかふに 女ぼうともをあつめ よなくけんじゆ
つをおしへる

しんせいは清もりとこゝろやすければ これをのそきよ
しともをかたらふ よしともいきほひにのつて きよもり
をうたんとおもひ いちみせしぞうたてかりける

よしともはものゝふのことなれば ふけいにたつしのぶ
よりをはけまし 一たんとおほへりくとう三りやくのぐん
りよにかなへり

われも心みけるこそあさはかなれ

山ぶきどの わたくしがだませふ

あゝ、そのたちのかまへでは おとしゆのやりさきとは
ちがふてくゝりかわよりうちへは喜すんでもいりこませ
ませぬ やあまいる

なにいわしやる これはしんかけりうしや

とのむら やりのしあい

とくさ みづからががまのてを おめにかかせふ

(十五丁裏)

さるほどに のぶよりはよしともをまねき みつゝにい
くさひやうでうよりく也 その冬十二月きよもりみくま

のへさんけいす 此時こそよきひまぞとくんばいしてその日になるをまちあたり

とかくはかりことがせんやうにごさる

いかにもそのづのおもむきのぶより

よしともいくさのひやうき

○第四卷

(十六丁表)

平ち元年十二月 清もりくまのへさんけいししやうしやうでんにて万どうをともし 平氏のぶうん長きうをいのる 此るすの内をよき折からと 藤原ののぶよりよしともをかたらひ だいをやきはらひ しんせいをさかせ共見えす ならへにげゆき いきなからつちへほりうめらる いまだしなぬ内におつてかゝり つちをほつて しんせいかくびを切みやこへかへる

たいらのきよもりくまのさんけい まんとうゑをとりおこなふ

(十六丁裏・十七丁表)

それよりのぶよりしゆしやうをばくろどの御所におしこめまいらせのぶよりみづからそくたいして にようごかういをおかしくげてんしやう人をことくあるいはる

ざい 又はころしほしいまゝにゐるふるふ

よしともなどにおんしやうをあておこなひけるはしばらくのゑいぐわなり きよもり此事をくまのにてきいていそぎ上らくし みかをとひそかに じん王寺へ御かうなさせ申 清もりがちやくなんしけもりに仰せてよしとも のぶよりをうたしむ のぶよりおくひやうにて いくさもせず とうごくへおちゆきしをとらへてころさる よしとも あく源太はたひくかつせんすといへ共 ついにうちまけてちりくとうこくかたへにげさる よしひらも清もりをねらいてころさる

くげたち なわめにあふ

くにくのぐんせい 大かた此方ともにも こめの五ひやうづ、くださりやう

のぶより

にようごかうゐ

くはんぢよ

(十七丁裏・十八丁表)

よしとももの二なんともながも ひぎのくちをした、かにゐられみの、くにおふはかにて 今はかうよと見へし時 父よしともにくびうたす よしともはてうてきなればい くほどなくいくさにうちまけ 西あふみひらのといふ所に た、ずみ八まんぐうをうらみ申て むかしは此つるきをも

つててきをせめ なひかぬくさ木もなかりしに 今は大ほさ
つもすてさせ給ふか 七代まではいかてすて給ふべき 此
ことくいくさにもろくまくべきとはおもはね よしともま
ては三代なりとて すこしまどろまる、

よしとも

ともなか ひぎの口をいられ

へいけのぐんびやう

有かたくも八まん大ほさつは むちうによしともにつげ
ての給は、われなんぢをすつるにあらず もつ所の友切
丸は まんぢうよりつたへしめいけんなり ひげきりひぎ
丸といふ はじめのなにもちいなば つるぎのやうもうし
なふまじきにしだいくになし 名をつけかへそのうへしゆう
のけんをかたくになし ことにいまのともきりといふ名
はてきをうたず 友を切ルといふにあたり ほうげんに
ためよしきられてより おと、どもみなきられぬ 是とも
切の名よりおこる也 つるぎのとかにあらず 名のとが也
われをうらむべからず むかしのなにかへしなばすへ
はよからんとしめし給そありがたき

ともながゆめのうち

西 ねものかたり

東 さめかゝる道

(十八丁裏・十九丁表)

三なん兵衛のすけよりともはすへのよのぶしやうとやみ
給ひけん 源氏ちうだい源太がうぶきのよろひをきせ友
切をはかせられたり たかしまのへんにて よりとも馬の
上にてねふり 父よしともにおくれたり のぶしともいけ
とらんとおつとりまく 此ときとも切丸をむかしのひげ切
と名をかへしきりはらひ給へはやにはに七八十人きりた
をさる

これひげ切に返しけんじさいこうのしるしとておぼへ
ける そのよはより朝しほづのせうじかもとにとまりそ
の、ちひげきりをあふはかの大るかもとにあづけおく 頼
朝代になつて 大るがもとよりまいらせけるがらすはよ
しともうたれてのち きよもりがていりたからとなる

よしともはをはりのくにのまの入江にてけらひおさだか
ために正月三日ふるの内にてころさる、 よりともはおは
りにて平家のさむらい弥平兵衛にいけとられ 二るのこう
のなさけにて いつのくに、なかさる、

のぶしおちうといけとりてからにせんとて よりともを
おつとりまく あるいはきられ 又はこしのつがいを切は
なさる

よりとも

のぶし大ぜひきりたてらる、

こしをなぐられた もふありかれぬ

(十九丁裏・二十丁表)

そもく平氏と申はうだの天王の御宇にたかもちのわうきみをもつてはじめてへいぢとす きよもりはかうや山にてくうかいのおしへにまかせゑちぜんのけひのみやとあきのいつくしまをこんりうし給ふ 此いつく嶋と申はしやかつたりう王の第三のひめみやにて 此いつくしまにあとをたれ給ふ 清もり小からすのこしをゑて いつく嶋にまふで平家のぶうん長久をいのらる 此しんぜんのかいしやうに一ツのきざいあり あらのかせんとてしやうじんけつさいのものだんごをこしらへ ひもろぎにした、めこれをとりゐのへんにながす時 ひとつともなくからす三ばとびきたり そのぐもつを一つくわへ 神ぜんへとびゆく ふたつともとらず これくわんもふじやうじゆのしるしとす

きよもりわうごにかなひ その身一生ゑいぐわにほこる事ひとへにべんざいてんの御かごなり

宮島

(二十丁裏)

源九良よしつねけんりやく元年八月平家ついでとうの時くまの、へつたうきやうしんか子たんそうがもとより源氏十たいもとはひざ丸今はほへ丸のたちをごんけんより申

うけてよしつねにまいらする よろこひてうすみどりとかいめいす よしつね此つるきをゑてより平家にしたがひしもの、ふことくくげんしにつくとそふしきなれ なるとあかまがせきにてへいけほるび よしつねゆみながしのと きくまでをきりはらひ弓をとりかへし給ふもうすみどりかするしなり

○第五卷

(二十一丁表)

その、ちよりもよしつね御中ふわになりこしこへよりおつかへされ給ふ時 此事をなげきはこねのごんげんへ此つるきを奉り 兄弟の中わこうなさしめ給へといのられる むさしぼうすなはちくはんしよをした、めうけ給つてごんけんへさんげいす むさしぼうべんけい

これより大山みち

(二十二丁裏・二十三丁表)

げんきう四年五月 よりともふしのみかりの時さかみの国の住人そかの十良同五郎おやのかたきくどう介つねをうつ時はこねへまいる

べつとうぎやうじつ こんけんよりもうしおろしうすみどりを時むねにあたゆ 此つるぎにておもひのまゝに助つ

ねをうつたりける

時むねいけどられ 此太刀よりともの手にいる さてこそむかしのひげ切ひざ丸いち具にそろひしぞめでたきそれよりより朝日本五き七だうをおさめ かまくら三代のぶしやとあふがれしも むかしあふみの国たかしまにて友切をかいめいせられししるしなり

むかしのひざまるこれなり

そか十郎介なり

同五郎時むね

(二十二丁裏・二十三丁表)

其のち時うつり 人王九十五代ごたいごてんわうの御宇 かまくらにはほうてう九代めさがみ入道せいむをとりおこなはれしが にちやおごりにてうじ 三百人のしらびやうしをか、ゑぢわうてうじのふろをこしらへ 白びやうしにあかをか、せ又てんにんの百みのおんしきといふことを思ひいだし 百いろのしよくもつをのがまはりにすへならべくるまをつけて此くひものをしよくせんと このめはたちまちくるまめぐりて まへにくるやうにしかけ 四きのたのしみもくぜんに四わうでんのけしきあらはし おごりのあまり天わうをおしこめ奉りをきの国になかし申 此ときひげ切ひざ丸のたちにつ田よしさだのてにわたりさしもてごはかりし入道たか時をうちほろぼしくはんぐんに

いさほしあり

さがみ入道 あくぎやくのおごり

(二十三丁裏・二十四丁表)

けんむ元年くわくしつとてにつたあしか、なかあしくたがいについとうのめんぜんのかひしところにてた、よし大とうのみやをころし申せし事ふんめうにて たかうぢをついとうのめんぜんをよしさだにたまはる

その、ちいくさたびくにて たがいにせうぶつかざりしかあしかたかつねこもりしゑちぜんあすわのこほりくろまるのしろをせめ いさほひほつくくにふるひしによしさだこ、ろおくれしおりからながれやにあたりまつかうをいさせければみづからくびをかきおとし田の中へおしこめうつぶしにふし給ふをうち江しげくにはるかにみつけ おのれがうちしていにもてなしかうめうとす

此くろ丸のほとりはふかたにてあれば たかつねはかりことをもつて田に水をせき入ぐんびやう田の中にひたりてさんぐくにあける

かくしぜい よしさだをやせめにす

につたよしさた

(二十四丁裏・二十五丁表)

あしかたよし二こしのつるきをいらん有し所にまことやたゞのまんぢうかそうでんして れき代のてうほう

なりとて たかうぢへ奉る あしかゝたかつねしばらくの
内たいせしがついにたかうぢのちやうほうとなる

わきやよしすけくすの木まさつらはいくんをあつめ
そのゝちたびくゝいくさせしか共たかうぢのいきほひつよ
くして みなこゝかしこにてうちじにす

それより いつとうにしたがひなひきしもひとへにひげ
切ひぎまる手にいりしゆへなりけり

すでにうちゑ中つかさよしさたのくびとよろひかぶとを
とりもちひげ切ひぎ丸のふたこしをそへてちうしんす

うぢゑなかつかさ

(二十五丁裏)

されば たかうぢより代々さうでんして あしかゝ十三代
あめがしたのぶしやうとなり めでたくおさめ給ふもこれ
めいけんのいとくたり

(まつばら のりこ・実践女子大学非常勤講師 実践女子大学
大学院博士課程平成十四年度単位取得満期退学)